W.R.エマーソン(1833-1917)の活動からみたシングルススタイルについて

A STUDY ON SHINGLE STYLE THROUGH THE ACTIVITY OF W.R. EMERSON (1833-1917)

牧田 知子*
Tomoko MAKITA

The Shingle Style in America, the word was defined by Vincent J. Scully, was occurred after the influence of Queen Anne from England. This paper analyzed on following 3 aspects through the activity of W.R. Emerson (1833-1917), the Architect in New England.

1. The difference of definition between Shingle Style and American Queen Anne.
2. The work of "Red Wood" (1879) in Bar Harbor by W.R. Emerson was analyzed as one of most important and first successful Shingle Style in American architectural history.
3. The 30 works of W.R. Emerson from 1876 to 1896 were analyzed to consider on the sense of new Americanism occurred in New England after the Civil War.

Keywords: Shingle Style, Queen Anne, V.J. Scully, W.R. Emerson, New England, 1880's era, rationalism
シングルススタイル, クイーンアン, V.J. スカーリー, W.R. エマーソン, ニューイングランド, 1880年代, ラショナルイズム

1. はじめに

米国独自の建築スタイルとして認められるシングルススタイルは、19世紀末にニューヨーク、ボストンの建築家を中心に米国東海岸のリゾート地に建築された¹⁾。フランク・ロイド・ライトの初期作品のオークパークの自邸(1889年)を含め、1880年代には著名な建築家が各活動の過程でシングルススタイルを試みている。そのデザイン運動は、イギリスを発祥とするアーツ・アンド・クラフツ運動の支流であり、またアメリカの独自性を表現する基点として今日的な問題意識をも含む注目すべき建築スタイルである²⁾。

シングルススタイルの成立は、1870年代にイギリスから導入されたクイーンアン(アン女王様式)、及びコロニアル・リバイバルの流行に関連していた。本稿では、まずクイーンアンの導入からシングルススタイルに到る過程を明らかにし、その上でシングルススタイル成立の一作品と受けとめられている建築家ウィリアム・ラルフ・エマーソン(William Ralph Emerson, 1833-1917)の「レッド・ウッド」(1879年)を取り上げ、またエマーソンの活動全体を考察する³⁾。エマーソンの活動についてはこれまで、ハーヴァード大学フォグアートミュージアムにおいて1969年に開催された展覧会のカタログ、及び建設立地をメイン州に限定した作品集があるのみで全体的な建築家像は捉えられていない⁴⁾。またアメリカ近代建築史

上におけるエマーソンの位置づけについては希薄である。それゆえ本稿では、まずシングルススタイルが成立する背景として19世紀末のボストンの建築界について述べ、エマーソンの作品を19世紀末における米国建築運動のなかに位置づける。

2. 米国におけるクイーンアン

クイーンアンは、1870年代に英米で盛んに復興された建築デザイン様式である。これは赤煉瓦を使用し、古典主義に由来した特に住宅に適した様式と受け止められていた。その解釈や定義は、発信地であった英国の1870年代においてすでに多様性を示し、ひとつの見解におさまってはいなかった。当時のゴシック様式の大家にとっては反逆的なデザインと見なされていたが、J・J・ステイヴンソンの「再ルネサンス」、「フリー・クラシック」といった位置づけによって、ゴシック精神に発した新しいデザイン様式として徐々に認知されたのであった⁵⁾。

クイーンアンの米国への導入が今日語られる場合、リチャード・ノーマン・ショウ(Richard Norman Shaw, 1831-1912)からの影響が中心である⁶⁾。ショウの「レイズ・ウッド」(1868年)からヘンリー・ホブソン・リチャードソン(Henry Hobson Richardson 1838-1886)によるクイーンアンへの影響がその導入

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
日本学術振興会特別研究員・工博

Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo.
JSPS Research Fellow, Dr. Eng.

期として建築史上位置づけられている。リチャードソンによるW・シャーマン邸（ロードアイランド州・ニューポート・1874年）は米国最初のクイーンアンの作品とされる。それに加え、建国100年祭（フィラデルフィア、1876年）の英国政府によるクイーンアンの出品作品が米国におけるクイーンアンの興隆を高めたのだった⁷⁾。

米国の建築界においては1870年代当時、英国のクイーンアンをどう導入するかという問題意識があった。例えば1877年4月のボストン建築家協会（1867年設立）の会合においてR・S・ピーボディ（Robert Swain Peabody, 1845-1917）は、「日本建築までも含む地域と時代を越えたスタイルの組合せ」というクイーンアンの性格を語った上で、「米国の場合は植民地時代の美しい造作の建築こそがリバイバルされるべき対象だ」と発言した⁸⁾。

1870年代末当時の見解から、米国で展開したクイーンアン（以下アメリカン・クイーンアンと称する）がシングルススタイルの創成に到る過程として、およそ下記の三点が考えられる。

- 一、ショウのクイーンアンに由来する個性尊重の自由な表現
- 二、南北戦争後の折衷主義と過去回帰、コロニアル・リバイバル
- 三、木造におけるアメリカン・クイーンアンの展開

一、はヴィクトリアンゴシックの末期的段階ではなくヴィクトリアン・ゴシック終了後の新様式としてのクイーンアンを意味する。とりわけ米国ではショウに由来する建築をシャビアンと呼称していた。また三、に示す様に、アメリカン・クイーンアンは煉瓦造や煉瓦貼ではなく、木造技術とそのデザイン展開を特徴としている。これは19世紀に米国で発達した厚さ2インチ材を使ったバルーンフレームの普及に基づく。すなわち外階から屋根まで一体となった間柱に、外壁・床材などを釘打ちした手法の木構造を採用した事がアメリカン・クイーンアンが英国のクイーンアンから分離していった最大の要因である⁹⁾。そしてこの木造表現によるクイーンアンの多様性の中にシングルススタイルの成立と展開の余地があった。

ここで今日的見解から1870年代の木造によるアメリカン・クイーンアンのおおよその建築的特徴を次にあげる¹⁰⁾。

- 一、アシンメトリー
- 二、壁面の水平分割、屋根の小分割
- 三、多様なパターンの工場生産のシングル（こけら板）張り、切妻壁の装飾的表現
- 四、一階部分の壁面に沿うポーチ
- 五、円錐形の塔

これ以外に付加される要素も多いが、むしろ自由な表現の域を越えた空想的・分裂的な過剰表現にこそアメリカン・クイーンアンの特徴がある。

アメリカン・クイーンアンに対するシングルススタイルの建築的特徴を捉えるに際してまずその代表作をあげると次のようである。リチャードソンのシングルススタイルの代表作としてストートン邸（マサチューセッツ州・ケンブリッジ・1882年）があげられる。マッキム・ミード・アンド・ホワイトのシングルススタイルの住宅には、I・ベル邸（ニューポート・1882年）があり、これは量感のあるシングルススタイルで、二層になったベランダを特徴としていた¹¹⁾。またスポーツクラブ施設「カシーノ」（1879-81年）は、格子に

なった木製スクリーンなどにフィラデルフィア博に由来する日本の影響がみられる作品で、水平線を強調したファサードを有した。ロウ邸（プリストル・ロードアイランド州・1886-87年）は、丘の上のロケーションにあって伸びやかで印象深い外観であり、シングルススタイルとして著名であるが、マッキム・ミード・アンド・ホワイトにとってはシングルススタイルの終結点であった。

ピーボディ&スターンズの代表作である「シングルス張りの城（The shingled Castle）」（マンチェスター海岸・マサチューセッツ州・1882-84年）は、シングルススタイルとして大規模である。アーチになった入り口、ロマネスク風の塔、日本の影響を思わせる格子細工など多様な要素を含みながら、全体はシングルの外装をまとっていた。スキップフロアになった内部は複雑に巧みに構成され、各部屋は海側へと向かって配置されている。

F・L・ライトのオークパークの自邸「初作（A Beginning）」（1889年）は、シングルススタイルのもつ自由さと幾何学的構成を組み合わせ、開放感と安定感の両側面を満足させていた。1880年代の米国建築界においてひとつの到達点であり、その後のライトの展開を予感させる記念碑的作品であった。

以上のような作品はシングルススタイルの事例の一部である。同時代に活躍したブルース・プライス（Bruce Price, 1845-1903）やアーサー・リトル（Arthur Little, 1825-1925）の活動も平行して捉えるべきであろうが、シングルススタイルの特徴をあげると次のようである。

- 一、クイーンアンに由来する各要素
- 二、シングルで全面的に覆われた外壁¹²⁾
- 三、ギャンブレレルーフなどコロニアル的（ヴァナキュラー的）、粗野な要素
- 四、アイブローなどの屋根窓
- 五、リチャードソニアン・ロマネスクの影響による不規則性の強調

一～四、に関して、個々の特徴をさらに列挙することができるが、総括すれば、シングルススタイルの第一の特徴は、アメリカン・クイーンアンの食欲的なデザイン摂取に相対する美学としての「シンプリシテイ」である。五、はりリチャードソンによるネオロマネスクを意味している。

3. ウィリアム・ラルフ・エマーソンの活動

米国建築史において、アメリカン・クイーンアンがシングルススタイルとして新たな展開をみる初期作品として取り上げられるのがエマーソンの「レッド・ウッド」（C・J・モリル邸、バーハーバー・メイン州、1879年）である（図1～3）¹³⁾。本稿では特にこの作品に注目した上でエマーソンの建築活動を追う。

ボストンを中心に活動したエマーソンのクロノロジカルな活動は、当時の米国建築界の状況を投影するとともに、シングルススタイルによる建築美を追求して一時代を特徴づけている。シングルススタイルによる作品は「レッド・ウッド」のほか、初期作品のシルヴィア教会（1881年）から、成熟期の作品であるF・L・オルムステッド（Frederick Law Olmsted, 1822-1903）の晩年の別荘（1896年）まで続く。エマーソンの作品は実家のあったメイン州に多いが、エマーソンに限らず、メイン州バーハーバーには1880年代に多くの

シングルスタイルの建物が建設された。

エマーソンの作品に対する同時代的な評価としては、ブルース・プライスが1890年の雑誌誌上で「アメリカの建築の中で最も先進的で美しい建築」と絶賛したことがあげられる¹⁴⁾。またボストンの著名人を紹介した*Boston of Today* (1892年)でもエマーソンが「カントリーハウスをシングルでアレンジ」して個性的な建築活動を行なっている事が報告されている¹⁵⁾。エマーソンの承継者で彼の作品のスケッチを多く描いたジョン・カルヴィン・スティーヴンス (John Calvin Stevens, 1855-1940) の活動は、後のエマーソンの評価を少なからず高めた。

エマーソンの全体の創作活動については後述することにし、まず「レッド・ウッド」に注目する。

「レッド・ウッド」はボストンの北約200キロメートル、アルカディアナショナルパーク内の島バーハーバーに位置し、施主はボストンの財界人、C・J・モリルであった。当時のバーハーバーは、裕福な人々の別荘地として人気があり、彼は他の三人のボストニア人と共にサマーコテージをこの地に計画した。「レッド・ウッド」の名称は土地周辺のアメリカ杉に由来している。

V・スカーリー、H・R・ヒッチコックなどの著述でレッドウッドが評価される点は主に以下の二点である¹⁶⁾。

一、英国クィーンアンに採用されたハーフティンバーというヴァナキュラーの要素をニューイングランドのシングルに読み変え、これを建物全体に用いたこと、一階部分に石、クラブボードを用いないこと。

二、ホール、バーラー (居間)、ダイニングルームの三室を基本にしたシンプルで開放的な一階、一・二階レベルの有機的な関係といったプランニングを有すること。

一、の素材については、一般的にコロニアルリバイバルはクラブボードを用いていることに対峙しているともいえる。二、に関して、N・ペヴスナーのシングルスタイルの定義においても、名称には表れていない開放的な内部の平面プランに米国的な特徴があるとされる¹⁷⁾。次にエマーソンの作品全体について、約30作から設計背景が明らかな作品について述べていくが、まずエマーソンの活動の周辺環境を著す。

エマーソンの父はメイン州で医業を営んでいたが、ゴールドラッシュの投機活動に伴いイリノイに移住、エマーソンはイリノイ州で生まれた。しかし彼が四歳の時に父親は長逝した為、エマーソンは実家のメイン州ケンネバンクと、叔父の家があったボストンの双方で幼少期を過ごした。エマーソンの叔父は高名な園芸研究家の叔父ジョージ・B・エマーソンで、エマーソンは叔父のもとボストンパブリックスクールを卒業した。その後、ボストン劇場 (1854年) の設計者の一人であったジョナサン・プレストンのもとで1857～1861年までドラフトマンとして働いた。

1864年、エマーソンはC・フェーマーとともに、パートナーシップによる設計活動を開始した。約10年間の共同設計においては、ボストンのロウハウスが建ち並ぶバックベイの住宅、東海岸の高級リゾート・ニューポートのサンフォード邸 (1870年)、ニューイングランド出版ビル (1873年) などにたずさわった。1867年、エマーソンはマサチューセッツ州ヒンハムで18世紀初頭に建設され

た植民地時代のミーティングハウスの保存修復を行なったが、これがコロニアル建築に対する興味となった。

1874年、エマーソンはフェーマーとのパートナーシップを解消し、独立した設計活動を開始した。そして先述の「レッド・ウッド」以降、エマーソンは裕福な階層の別荘建築をメイン州に多く手がけていった。

1880年代から90年代にかけては、住宅を中心としてエマーソンが最も多作の時期であった。建設背景が明らかな代表的作品について、以下この時代の作品を要約する。本稿では省略するが、作品には詩的なタイトルがつけられている。

以下、表1に従って解説していく。

1. 初期作品のホメオパシック病院はヴィクトリアンゴシックによっていた。
2. フォービス邸はスティックスタイルによっていた。一、二階を覆う大きな切妻屋根の組み合わせは後に定型化していく作風を予見させるものであった。
3. ユースティス邸は開放的な平面で、のちの別荘、サマーハウスの作品への展開として注目される。
4. (先述のモリル邸「レッド・ウッド」)
5. シルヴィア教会は、内・外共にシングルで覆った作品であった。鐘塔はヒンハムのミーティングハウスから発想したものであった (図4)。そのピクチャレスクな外観がスティーヴンスのスケッチに描かれている。約300人を収容するカトリック教会として建設されたが、バーハーバーの人口増加に伴い1886年にはネイブを増築している。同様なデザインの作品にマルガレーツ教会 (ピバリー・マサチューセッツ州・1887年) がある。
6. コ克蘭邸は、ユースティス邸及び「レッド・ウッド」に共通した要素を有し、一階の海に面した開放的な平面プランはさらに米国的にその自由度を増している。しかし二階に配された装飾板、建物基部の石積みなどに英国的な要素をのこしている。またジョージアン調のモチーフとして、階段室及びエントランスにバラディアンタイプの窓が配されている。
7. ローリング邸は、コ克蘭邸の近隣に建設されたシングルスタイルの作品である。施主はボストン美術館のディレクターを務めたエジプト美術の鑑定家であった。平面はシンプルで、ホール、バーラー、ダイニングルームを基本としていた。
8. スコット邸は、バーハーバーの最も高台でドラマティックな場所に位置し、ピクチャレスクという観点においてエマーソンのシングルスタイルの代表作である (図5～6)。石積みの土台の上に建ち、壁面に沿った長いピアッツァ、中央に配置されたタワーを外観の特徴とする。平面におけるレベル差の活用、空間の流動性という点においては、「レッド・ウッド」からさらに発展している。バーラー及びホールはピアッツァ (ベランダ) にむかって開放的に配置されている。英国建築雑誌 (*The Builder*, London, Dec. 25, 1886) には、土地の気風に関する概念＝ゲニウス・ロキをふまえた作品として紹介された。
9. ムスグレイブ邸は、シングルで覆われ堂々とした外観を呈しているが、ノーマン・ショーのクィーンアンを連想させるオーナメントを取り合わせている。ニューヨークの裕福な銀行家の別荘であった。

10. ポストン美術クラブは、多様なオーナメントを取合わせたブリックのアメリカン・クイーンアンであり、ポストンのそれを代表する(図7)。室内装飾においても80年代の傾向を顕著にして木の造作にペンキを施していた。

11. ヘメンウェイ邸は、シングルを主な素材としていたが、一階部分は石積みであった。シングルは暗い赤色に塗装し、石の部分との調和が図られていた。平面はシンプルで玄関から直接階段室に連結するようになっていた。室内ではパネル化された花模様の木部の造作が目される。

12. スティーヴンソン邸は、他の作品と異なってシンメトリーの平面であった。全体の平面プランは暖炉のない大きな中央ホールによって二分割され、ホールに続く階段室は大きなパラディアンウィンドウによって採光されていた。ホール右手は続き間のパーラー、左手は長円形のダイニングルームになっていた。

13. グルニー邸は、シングルで覆われているが、ムーア風アーチなどロマネスク的である。施主はニューヨークに在住、別荘建築としてかなり大規模であり、ビリヤードルーム、ギムナジウムなど多数の室を含んだ。

14. ホワード邸は、スコット邸の近隣に位置する。施主はシカゴの建設業者であった。作品名はモスレイ・オールド・ホールと称し、これはイギリスのカントリーハウスに追随しようとしたもので、作風もショーに類似していた。1898年、賃貸用となった。

15. スプロールマーケットは、バーハーバーの商業建築である。ペディメントを配したコロニアルリバイバルによっていた。

16. 聖ピーター教会は、バーハーバー周辺に休養にきた人々のための150人収容の監督派教会であった。小規模な住宅風の教会ながらシングルで覆った外観は重厚感があり、アイブローの屋根窓が特徴的である。

17. ライアンズ邸は、サマーハウスというより郊外の独立建て住宅風で、アメリカン・クイーンアンである。平面上もホール、パーラー、ダイニングルームといった従来の基本的な部屋が並列的に配置されている。

18. ウォーリー邸は、ポストンの法律家のサマーハウスであった。ハーフティンバーになった壁面の二階部分のせり出し、左右のベイウィンドウを外観上の特徴としている。

19. エマーソン自邸は、エマーソンのシングルスタイルにおける成熟期である。急勾配のギャンブレレルーフは量感と同時に穏やかさを醸し出していた。内部は他の作品に比較してより素朴に仕上げられていた。

20. ジョーンズ邸の施主は、フィラデルフィアの富豪で、ヨットマンであった。大胆な扱いのギャンブレレルーフで建物全体が形づけられている。また波形のシングルが張られた建物コーナーの多角形の塔は、海側と庭側で建物外観の表情を変えていた。室内の壁もシングル仕上げである。

21. ジェイネ邸は、ペンシルヴァニア大学に属する作家が施主であった。交差になった切妻屋根、屈曲する外壁ともにシングルで覆われていた。入り口のポーチやパラディアンウィンドウなどに保守的な要素が取り合わされていた。

22. ダンバー邸は、ギャンブレレルーフの大屋根とその裾にひろがったベランダが大らかさを表現していた。施主はフィラデルフィア

在住であった。

23. 聖ジュード教会は、監督派教会であった。内部は小屋組の三角トラスをそのままあらわし、壁面も間柱のままの仕上げであった。外壁は屋根からパットレスまでシングルでくるまれていた。アイブローの屋根窓、鐘楼を兼ねるポーチの呈する外観は瀟洒である。

24. スティックネイ邸は、くの字形平面に、大規模なギャンブレレルーフと簡素な切妻屋根を組み合わせている。この構成はエマーソンの大規模なシングルスタイルの定型となっていた。

25. ユニタリアン教会は、シングルスタイルの簡素さにキューボラの鐘楼などコロニアルリバイバルのもつ要素を加味して、ユニークである。

26. 組合教会は、地元産の赤いみかげ石を荒い仕上げにして用い、外部内部ともにロマネスクスタイルであった。リチャードソンのロマネスクを意識したと察せられる作品であった。

27. ブレイク邸は、エマーソンの作品の中では平面を含めて最も保守的な部類である。トスカナ風の柱のたつポーチなどコロニアルリバイバルの個々の要素を多分に取り合わせている。施主はケンブリッジの製紙会社の経営者であった。

28. ブルーヒル・インは、小規模で裕福な夏季コロニーであるブルーヒルの宿泊施設である。施主はブレイク邸の施主に関連し、ケンブリッジの製紙会社幹部であった。ブレイク邸に類似し、より大規模なギャンブレレルーフにいくつもの出窓を配していた。

29. アルドリッチ邸は、ニューイングランドの著名な作家トーマス・ベイリー・アルドリッチが施主であった。シングルの外装は現在は明灰色に塗装されているが、当初は深紅で仕上げられていた。四棟の小さな切妻屋根と一棟の大きな切妻屋根が組み合わせられ、それ以上に付加的な装飾はなかった。サービススペースを除いて全室は海の方に面していた。

30. オルムステッド邸は、アメリカの環境形成に大きな貢献をしたランドスケープデザイナー、オルムステッドの晩年の別荘である。この作品の段階では平面の扱いに自由度が増し、近代性という点でエマーソンの到達点といえる作品である。

以上、エマーソンの作品を包括して述べた。これらの作品以外では、未詳ながらポストン近郊の19世紀末のヴィクトリアン・サバーク、すなわちサム・バス・ウォーナーの造語でいうストリートカー・サバークでエマーソンの作品が見いだせる¹⁸⁾。ポストンのヴィクトリアン・サバークの代表事例としては、ジャマイカ・プレーン(Jamaica Plain)が著名である。ここは独立革命の重鎮ジョン・ハンコックの夏の別邸があったように当初ポストン近接のリゾート地であり、路面電車の整備によってポストンの郊外住宅地となっている¹⁹⁾。さらに人口の増加につれ、F・L・オルムステッドによって、1878-95年、ジャマイカ・ポンドの環境要素を取り込む公園システムと共に組織化・整備された住宅地である。

エマーソンはジャマイカ・プレーンに数軒の住宅作品をつくっている。1880年の住宅作品(図8、15 Greenough Ave.)は同時期の「レッド・ウッド」と比較して室の不連続性など全面的に保守的であり、エマーソンの解釈によるクイーンアンが表現されていた。木部ディテールなどにエマーソンらしくハンドクラフト的な扱いがみられ、エマーソンの作品の一側面として無視できるものではない。

No.	完成年	作品名	場所	建築スタイル	備考 (雑誌掲載、特徴的な建築要素)
1	1876年	ホメオパシフィック病院	ボストン (マサチューセッツ州)	ヴィクトリアンゴシック	現・ボストン大学メディカルセンター
2	1876年	フォービス邸	ミルトン (マサチューセッツ州)	スティックスタイル	切妻屋根の組み合わせ
3	1878年	ユースティス邸	ミルトン (マサチューセッツ州)	クィーンアン	リチャードソンのロマネスクの影響
4	1879年	モリル邸(レッドウッド)	バーハーバー (メイン州)	シングルススタイル	AABN, Mar. 22, 1879
5	1881年	シルヴィア教会	バーハーバー (メイン州)	シングルススタイル	AABN, June 25, 1881, 1909年焼失
6	1881年	コ克蘭邸	ビバリー (マサチューセッツ州)	シングルススタイル	1881年取り壊し、バラディアンウィンドウ
7	1881年	ローリング邸	ビバリー (マサチューセッツ州)	シングルススタイル	AABN, Oct 4, 1884
8	1881年	スコット邸	バーハーバー (メイン州)	シングルススタイル	1947年焼失、英国建築雑誌に掲載
9	1881年	ムスグレイブ邸	バーハーバー (メイン州)	シングルススタイル	1938年取り壊し
10	1882年	ボストン美術クラブ	ボストン (マサチューセッツ州)	クィーンアン	AABN, June 3, 1882
11	1882年	ヘメンウェイ邸	カントン (マサチューセッツ州)	シングルススタイル	AABN, Jan. 29, 1887
12	1882年	グルニー邸	バーハーバー (メイン州)	シングルススタイル	1938年取り壊し
13	1883年	ステイブソン邸	ミルトン (マサチューセッツ州)	シングルススタイル	AABN, Nov. 8, 15, 1884, バラディアンウィンドウ
14	1883年	ホワード邸	バーハーバー (メイン州)	ロマネスク風	1938年取り壊し
15	1883年	スプロールマーケット	バーハーバー (メイン州)	コロニアル	取り壊し
16	1884年	聖ピーター教会	ロックランド (メイン州)	シングルススタイル	アイブローの屋根窓
17	1884年	ライアンズ邸	バーハーバー (メイン州)	クィーンアン	AABN, June 28, 1884, 1963年焼失
18	1886年	ウオーリー邸	バーハーバー (メイン州)	シングルススタイル	1879年取り壊し、2階のハーフティンバー
19	1886年	エマーソン自邸	ミルトン (マサチューセッツ州)	シングルススタイル	ギャンブレルルーフ
20	1888年	ジョーンズ邸	ケネバンク (メイン州)	シングルススタイル	ギャンブレルルーフ
21	1888年	ジェイネ邸	バーハーバー (メイン州)	シングルススタイル	1947年取り壊し、バラディアンウィンドウ
22	1888年	ダンバー邸	ケネバンク (メイン州)	シングルススタイル	ギャンブレルルーフ
23	1888年	スティックネイ邸	キテリイ (メイン州)	シングルススタイル	1975年取り壊し
24	1889年	聖ジュード教会	シールハーバー (メイン州)	シングルススタイル	アイブローの屋根窓
25	1889年	ユニタリアン教会	バーハーバー (メイン州)	シングルススタイル	1978年取り壊し、キューボラの鐘楼
26	1889年	組合教会	バーハーバー (メイン州)	ロマネスク	1942年焼失、地元産の御影石仕上げ
27	1892年	ブレイク邸	カステイヌ (メイン州)	コロニアル	トスカナ風の柱
28	1892年	ブルーヒル・イン	ブルーヒル (メイン州)	シングルススタイル	ギャンブレルルーフ
29	1893年	アルドリッチ邸	テナンツハーバー (メイン州)	シングルススタイル	切妻屋根の組み合わせ
30	1896年	オルムステッド邸	ティアーアイル (メイン州)	シングルススタイル	平面の自由度の拡大

表1 エマーソン主要作品 (表中のAABNはAmerican Architect and Building News, Boston&NewYork)

図1 レッドウッド 1階平面図

図2 レッドウッド外観

図3 レッドウッドのホール

図版出典: 図1 American Architect and Building News, Mar. 22, 1879, No. 169. なお、図中の室名は、1. Kitchen, 2. Dining Room, 3. Hall, 4. Parlor, 5. Pavilion、図2 Cynthia Zaitzevsky, William Ralph Emerson 1833-1917, Harvard Univ. 1969, plate 8. 図3 Cynthia Zaitzevsky, op. cit., plate 10

図4 シルヴィア教会外観スケッチ (1880-81年)

図8 ジャマイカ・ブレーンの住宅作品-1 (1880年)

図5 スコット邸外観スケッチ (1881-2年)

図9 ジャマイカ・ブレーンの住宅作品-2 (1893年)

図6 スコット邸1階平面図

図7 ボストン美術クラブ外観スケッチ (1881-2年)

図版出典: 図4 *American Architect and Building News* June 3.1882. 図5~6 *Builder*, December 25.1886、図7 *AABN*, June 25.1881, 図8~9 1987年、筆者撮影

また1893年のボストンの著名な弁護士のための住宅(図9、現・子供博物館兼基金センター、100 Pond St.)は、ジョージアン調であった。つまりこのような都市部におけるエマーソンの作品は保守的であり、自由な価値観が評価されるリゾート地という背景において、「レッド・ウッド」のような新境地の作品が制作されたということがいえる。

4. 結

エマーソンの作品は、シングルの素材を使うことによって独自の作風を呈しており、プランニング全体に表れた近代性、あるいはアメリカニズムの新たな表現にエマーソンの評価が認められる。しかし作品全体を通してみれば必ずしもシングルスタイルのみに統一されるわけではなく、適宜にクイーンアンをはじめとする流行のスタイルが用いられている。大きく捉えれば、バーハーバーのような雄大なランドスケープではシングルスタイル、都市部ではクイーンアンというように環境に応じて表現方法が使い分けられている。

シングルスタイル建設のフィールドとなったバーハーバーが、リゾート地として最も繁栄したのは、1880年代後半から1900年頃迄である。19世紀末、新進気鋭の人々が別荘地としてこの場所を選択し、シングルスタイルによる新しい建築デザインを試みていた。その繁栄の先駆けの時代に建てられたエマーソンの「レッド・ウッド」は、英国のショウに由来するクイーンアンの影響のもと、ニュ

ーイングランドにおける構法・素材により創作された作品である。シングルを用いた静寂さを保つ外観に対して、開放的で有機的なプランニングを内包し、それは確かに英国から導入されたクイーンアンとは一線を画すると誇れる作品であった。

マッキム・ミード&ホワイトがロウ邸を「簡素な新芸術 (The New Art of Simplicity)」と題したように、シングルスタイルはアーツ&クラフツ運動が意識されている。その際、顧みる中世のない米国では、植民地時代に遡った点において、手工業というより素朴さ、シンプリシティに美徳の重心が置かれた。物質文明は否定せずとも自然への指向が意図されたのである。それは建築家の意思という面もさることながら、建国百年という時間を経たことにより、目先の欲望に束縛されることなく、質実かつ自由な建築を求める人々が施主として待機していたことを示している。

南北戦争後における折衷主義の傾向が示した破綻と創出の局面において、シングルスタイルの流行は、アメリカの雄大な自然に対するラショナルイズム、過去に対するラショナルイズムの模索であった。アメリカン・クイーンアンとシングルスタイルの関係は、表面上の違いよりも、デザインの背後にある精神性に、時代を二分する相称的な意味合いが絡み合っている存在する所にその真髓が存在する。

総じていえば、伝統回帰のリバイバルにとどまらず、アメリカの新しい発展が建築的に期待されたところがシングルスタイルたる所以である。それは民衆的でつましい生活を意図的に表現するという目的を持っていた。またその傾向は、エマーソンと遠縁であったラルフ・ワルド・エマーソンの象徴主義に伴う自然への神秘的思考を背景にしていたとも考えられる。エマーソンが影響を受けたヴァナキュラーとして、植民地時代のミーティングハウスは、ニューイングランドの各集落において独立革命の際において拠点となった建物である。つまりその建物には、米国民の独立を精神的に記念する要素が含まれている。こうしたヴァナキュラー建築を通して新しいピクチュアレスクのデザイン観念が発見され、それがニューイングランドのランドスケープに投影されていった成果がシングルスタイルである。この新たなピクチュアレスクのデザイン観念とニューイングランドのランドスケープの関係については稿をかねて言及していきたい。

註

1) 「シングルスタイル」はアメリカの建築史・理論家であるV・スカリーによる造語である。cf. Vincent J. Scully, Jr., *The Shingle and the Stick Style*, Yale Univ. Press, 1955, 1971. なおシングルスタイルの定義など本稿の一部は、拙稿「アメリカン・クイーンアンとシングルスタイルー1 ウィリアム・ラルフ・エマーソン作<Red Wood>について」(日本建築学会大会集1998年9月) pp.299-300、及び「アメリカン・クイーンアンとシングルスタイルーW・R・エマーソンの活動からみた19世紀末米国のラショナルイズム」実践美学美術史学会『美術美術史』第15号(2000年10月, pp.83-99)でとりあげた。

2) 1960年代において、R・ヴェンチャー、C・ムーア、R・スターンなどヴァナキュラーのデザイン要素を引用した作品は、グレー派もしくはフィラデルフィア派と称された。またP・アイゼンマン、M・グレイブス、C・グワズミイ、J・ヘイダック、R・マイヤーの五人の建築家はル・コルビュジェの影響が強く、ニューヨーク・ファイヴあるいはホワイト派と呼ばれ、70年代前半に相対する両派について活発な論議が行なわれたことを意味する。

3) ウィリアム・ラルフ・エマーソンは、米国の美術運動の思想に大きな影響を与えた超絶主義のラルフ・ワルド・エマーソン (Ralph Waldo

Emerson 1803-82) と遠縁で、エマーソン家はニューイングランドの旧家。

4) 1969年、ハーヴァード大学フォグアートミュージアムにおいて、展覧会、*William Ralph Emerson 1833-1917*が開催された。エマーソンのクロノジカルな活動については、Cynthia Zaltzevsky, *William Ralph Emerson 1833-1917*, Harvard Univ. Press, 1969, Roger G. Reed, *A Delight to All Who Know It*, Maine Historic Preservation Commission 1990を主要参考文献とした。

5) 鈴木博之「新しい様式を求めて」『ヴィクトリアンゴシックの崩壊』第三章、中央公論美術出版、1996年参照。

6) cf. W. Knight Sturges, 'The Long Shadow of Norman Shaw', *Journal of the Society of Architectural Historians*, vol.9, no.4, Dec. 1950.

7) cf. Henry-Russell Hitchcock, *Architecture: Nineteenth and Twentieth Centuries*, Yale Univ. Press, 1958, 1977, pp.362-368. また註1の第一・二章参照。

8) *American Architect and Building News*, vol.2, Apr. 28, 1877, p.133.

9) Leslie Maitland, *The Queen Anne Revival Style in Canadian Architecture*, Parks Service, Ottawa, 1990. 同著によるとカナダのクイーンアンもショウの影響を受けたが主にブリックの表現で展開した。

10) Virginia Savage, Lee McAlester, *A Field Guide to American Houses*, Knopf, N.Y. 1984. などによる。

11) 坂本まり「マッキム・ミード&ホワイトの作品における造形手法に関する研究」1994年(東京都立大学学位論文)参照。

12) 清家清監修、『アメリカン・ハウス その風土と伝統』、講談社、26-27頁。外壁をシングルで覆う方法は、17世紀半ばに導入されたオランダ民家に由来するなど諸説ある。ニューイングランドの民家について次者参照、Thomas C. Hubka, *Big House, Little House, Back House, Barn: The Connected Farm Buildings of New England*, Univ. Press of New England, 1984.

13) 註1の著書 *The Shingle and the Stick Style*, p.83, 註5の著書 p.365 などによる。

14) cf. Bruce Price, 'The Suburban House', *Scribner's Magazine*, vol.8, July, 1890, p.18.

15) cf. Richard Herndon *Boston of Today*, City, 1892, P.220.

16) 7)に同じ。

17) ニコラウス・ベウスナー著、鈴木博之監訳『世界建築事典』鹿島出版会、1984年、p.190

18) ストリートカー・サバーブはSam Bass Warnerの造語である。cf. Sam Bass Warner Jr., *Streetcar Suburbs: The Process of Growth in Boston 1870-1900*, Harvard Univ. Press, 1962, 1978.

19) ジャマイカ・プレーンについて、Alexander Von Hoffman, *Local attachments*, Baltimore Johns Hopkins Univ. Press, 1994を参照。

なお、本稿は文部省科学研究費補助金奨励研究「日本及びアメリカの郊外住宅地に関する史的的研究」(研究代表者: 牧田知子 平成10~12年度)の研究成果の一部である。

(2000年8月29日原稿受理、2001年2月20日採用決定)